

金色ノ如キモアリ、銀ノアルヲ銀タレ、金ノアルヲ金タレト云事ナリ、是ニ
「可」レノ茶曰石ニ隨分アルモノニテ金タレ銀タレト云モノ及ハテ多ナリ
コノ指物師ハ至極上手ナリ、茶曰ノ事ハ自然トスキナリ、指物ヲサシオキテ
茶曰直シテ平生手ニカケ井テ是ノミニシヨリシ故、自然ト上手ニナリシナリ
ヲシキカナ故人トナリ、ソノ後廢直シノニ手ナキニヨリ、禁、数年ヨリ進
タシナミ漸ク年老テ工夫セシマ、アラマシキ事留ムルモノナリ、

清風瓊言ニ申治ハ是ニ御印ノ建溪北苑ナリ、且又ソノ山骨ヲ抜
テ茶曰ヲ造出スコノ石他ニ出スコノ地ノ土石カクマデ茶ニ造アルハ奇ナリ
宇治傳ニ茶曰谷ト云アリ、宇治橋ヨリ凡ニ三町ホト川上ニテ、
槇島村領ナリ、クツハテト云、宇治ト槇島トノ山ノサカニ目ヨリ
赤下半川上、米カシト鮎取場トノ間ニテ、川ヨリ田實ノ方ニテ、川ニ付テアル山
ナリ、今ハコノ山ニモヨク性ノ石ハナシト云、石ノ説及宇治石ト云モノ性ハ一堅

京都府茶業研究所

シ、石ノ外皮ハダク色ハ、申治石トミユルモノアリ、サゴアデテトミテ色々アリ
中ハ大方同シ事ニテ地色薄青ク白キ星ノ如キ者アリ、金銀ノ色ノ星ノ如キモア
リ、コノ三名ト云ルナリ、又青地色ノ濃キ茶曰石ニハ、白キ星ノ如キモノ無
数ノモノアリ（宇治茶曰ハ唐産茶ヨリモヨシ直段、テイハ、ニ唐産ヨリ三倍モス
ト云）宇治ニ河川緑兵衛ト云モノアリテ茶曰直シタル思、コノ者御所ノ
所用新茶曰ヲ示ソテ、石屋ノ細工入ヨヒヨセテ、禁裡御所、御茶曰所用
トアル、懐ヲ立、茶曰谷ノ古キ曰ヲ唐産新シクニテ、上テ奉リタリト聞ク
曰直スニヒテ下聞事

京都府林熊次郎ノスル心木ステミハ、東ヨリ木ノクサビ打込ニオクナリ
此ノ如クモト心木ユミテ持タヌモノナリト云フ甚見當ニ、クサビ打ツニ夜ハマ
ナリ

伏見石屋清太郎ニ林熊次郎モ、加茂川石ノ天真直ナルニテ曰ク

スリオヒシタル上ヲミクク申ナリ。是ハ遠クニ及ハスイカヤウニテモ土ニ仕セサハヨク
シハ舌カ茂川石ハ至テ堅キ也

金剛砂ノ事ト

指物師藤共衛云純州金剛山ハ金山ナリ。金ノ勢ニテ出采タリコノ山ノ林邊
ドハ川ト云川ヨリ出ツト云リ此ノ説不分明ニ思ハル

金剛砂一合目カタ 徳格 百五文 代七十六メ 文政三辰十月

同 二合目カタ 百三文 代三十五メ 天保十五手九月

同 一合目カタ 百一五文 代 嘉永二丙十月四日

金剛砂ヲ曰茶細ニ遠テ流落シタル水中ニ石ノ粉ニナリタルト金剛砂
ノ粉ニナリタルト交リルヲ茶碗又ハ鉢ナトシテ水ヲ入レテ力チマツフ
レハ石ノ粉上ニウクテ之ヲナガセバ下ニ金剛砂舞ルヲ取リヨテテオクナリ
京都ノ至屋ニ買フ時鳥目百文ニ付凡三合ヨリ一合土ヲマデノ價ナリ

京都府茶業研究所

於高下アリ惟ソヨシカシハナシト云

茶曰真料

石屋清土郎方曰壹ツ金百足手間賃ナシハ年當持茶一人四文三分先六ニ致
出サハ二八三ニ三分

一百元 同 京茶野元金百足ツ當也ニテ曰直シ尾候ヨク 下手 評申候

下手ト評申候ナリ

一 淨室町石屋ハ上ノ道中所謂向ヨリニテ上下道中日數ミ入レテ他人手間全
一百足ツ下サレタラハ直シニ茶ルト申スコノ仁磨ノ細ニ目取方心不 穂木
被不寄大荒細ニテ甚ダ見苦シ

白元新ニ干白扱ナト甚奇麗ナリ也来ナリ挽者毛遠ク手馴上手ニ
ナレリ宇津ミ上下白トモ直シ百足上白下白手ナトハ出来ツニスルヤ
ウス、片一方八道ノ手入ニ及ハナル故出来ニテヨロシト申ス由ナリ

指印師以兵衛直料心木スケカ入代銀志面但シ心木ノ木ハ曰直チヨリ出シテ
曰ミスエテ遠シタル真銀ナリ 挽木代銀ニ又但シ挽木ハカリニミ又曰ヨ
キ程ニ切リテスゲテ遠シテモ同真銀ナリ、右ハ大氏宜シキ挽木ナリ尤挽木
ノ直シ志心ヨリテ真銀違フナリ、曰ヲ少シ合バスリ直シテ目ヲ切テ心木ス
ケカニ入代金言定但シ挽木ハ格別ナリ 曰ニ蠟ヲ引ク事代南録壹片
ト云テリ夫ハ高キ取リメニスメント云バ幸ナリ其如ク云ハ手間入ル故メ
トウシタ大伴ナラハントモナキゴトナリト云
以上秘抄ノ又キ言ナリコノ次ニ何テ茶記式ノコトニエス引キハナシテト
リタル茶人ノ流傳ガウサナルシヲシテ事限リナシ本書ハ一巻石新トモ
ナリ之故三庚辰水月改メ天保十三年辛丑雨相月再改メナリ其時迄ヲ改メテ
秘抄トシタルヤウニシユトモ今ハ碓氷ノカタヲトリテ標如ト入時ニ明治
二年三月ノ頃ナリ今茲大正九年庚申西暦月節ナリ

京都府茶業研究所

椽堂老人談

昭和四年一月三日

京都府久世郡宮内町若森 茶業研究所 於テ